

令和 3 年度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

比較文化学科
学校推薦型選抜(一般)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら最初に、受験番号を小論文解答用紙右上の指定欄に記入しなさい。
3. この冊子・解答用紙について印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は2枚配付しますが、1枚だけ提出しなさい。残りの1枚は下書き用です。
5. 解答は縦書きで書きなさい。
6. この冊子と下書きに用いた解答用紙は、持ち帰ってください。

次の課題文1と2を読み、設問に答えなさい。

課題文1

無形文化遺産とは

ユネスコ無形文化遺産は、よきにつけ悪しきにつけ、有形の世界遺産とは異なる性格をもっている。端的に言えば、ユネスコ無形文化遺産は、歴史の教科書に載るような有名性(世界遺産条約の文言では「顕著な普遍的価値」と表現されている)を備えておらず、誰が見てもすごいと思えるようなものではない。

しかし、わずかながらも熱心な人びとに支えられてきた伝統は、その遺産の担い手に誇りをもたらす(無形文化遺産条約の文言では「社会及び集団に同一性及び継続性の認識を与える」と表現されている)ため、文化的な価値がある。そうしたローカルなものを人類共有のものとして維持してこそ、世界全体で文化の多様性が維持される、というのがユネスコの考えかただ。

〔中略〕

ザフィマニリの木彫り知識

さて、わたしがマダガスカルユネスコ無形文化遺産をとり上げようとする理由は、商品化の歴史がきわめて浅く、まさしく「知られざる文化」としての性格が顕著だからだ。その文化遺産とは、ザフィマニリと呼ばれる人たちが伝えてきた、木彫りについで知識である。

ザフィマニリ人は、一万人を超えるか超えないかくらいの小さな民族集団で、人口二〇〇〇万を超えるマダガスカルのなかで少数を占めるにすぎない。彼らが住む地域は、首都アンタナリヴからの距離は三〇〇キロメートルほど離れているのだが、アンタナリヴの人でもザフィマニリを知らない人たちはまだまだ多い。

〔中略〕

主として男性がおこなう木彫りは、水辺の草を使って女性がおこなう組み編みと並んで、生活必需品を作り出す技術だった。それらに関する知識は、多かれ少なかれ、誰もが身につけていたのである。

象徴的なのは、彼らが住む家屋だ。マダガスカルにも多様な木造住居建築があるが、たいていは粗末なもので、雨季に訪れるサイクロンの前には耐えられないことがある。しかしザフィマニリの家屋は、しっかりと建てられてさえいけば、せいぜい屋根が被害を受けるだけで倒壊することはない。

こうした木造家屋は一九世紀後半頃まで中央高地に広く分布していたようだが、レンガという新素材が入ったことと木材価格が高騰したことにより、いまやザフィマニリの人たちが伝えているだけだと言っても過言でない。彼らの住居は、原則としていつさの金属を使わず、ほぞとほぞ穴の組みあわせだけで建っている。大きな組み木細工とみなせるかもしれない。その加工は熟練の大工だけがほどこしたが、木材の調達や材の組みたて、仕上げなどは、施主の家族が総動員しておこなった。

普請の仕上げのひとつは、開き戸式の木製窓にほどこされた幾何学的な浮彫り模様だ。この写真を見た日本人には、魔除けや家紋ではないかと訊く人もいる。しかしそうした意味合いよりも、家の個性を際立たせる装飾の意味合いのほうが強いようだ。

ほとんどのモチーフは方形と円形の組みあわせだが、なかには動物や鳥をあしらった具象画のこともある。熟練の彫り師に製作を頼むこともあるが、家の個性を際立たせるのが目的だから、下手でも自分で彫る人もいる。いずれにせよ、これらのフォトジェニックな模様は、無形文化遺産のリスト記載に大きく貢献した。フランスでは、木製窓だけの展覧会も開かれているほどである。

無形文化遺産化と商品化

ザフィマニリの木彫りが地域外で知られるようになったのは、いまから半世紀ほど前である。この頃、ザフィマニリの人たちを相手に活動していたフランス人神父のペルトロ・ヴィユヌーヴが、凶作時に農民たちの現金収入を確保するため、木彫りを商品化した。そしてその直後、アンタナナリヴ大学の芸術・考古学博物館が組織的な民族誌資料の収集をおこない、フランス語圏にザフィマニリの木彫りを紹介した。

やがて、ザフィマニリが自給的に木材を伐ったり加工したりする能力は地域の外でも評価されるようになり、木材伐採会社や製材会社がザフィマニリの人びとを季節労働者として大量に雇用するようになった。この動きは結果的に、ザフィマニリの木彫りが地域外で流通するのを加速し、ザフィマニリの知名度を高めた。

二一世紀に入ると、ラヴァルマナ大統領領がリベラルな外交政策をとったため、マダガスカルを訪れる海外観光客の数が著しく増えた。この影響は、アンタナナリヴから三〇〇キロメートル足らずの位置にあるザフィマニリ地域にもおよび、商品経済から距離を置いて暮らすザフィマニリの村々を徒歩で訪ねるトレッキング・ツアーが催されるようになった。自動車道が通じる入口の村では、トレッキング・ガイドやポーター、料理人などが観光客を待ちうけるようになり、自動車の通らない村では、観光客を民家に泊めて謝礼をもらうようになった。

ザフィマニリの木彫り知識は、二〇〇三年にユネスコの「人類の口承および無形遺産の傑作」に選ばれた。これは、二〇〇一年から二〇〇五年までの三回にわたってユネスコが選定したもので、この機会に選ばれた九〇件は、無形文化遺産条約が発効したものの二〇〇八年に「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載された。

それ以来、ザフィマニリの木彫り知識は、ユネスコ無形文化遺産というブランドを背負うことになった。ザフィマニリの人たちは、自身は、ユネスコの活動や理念をほとんど理解しておらず、「無形文化遺産」という語にもほとんどなじみがないが、ユネスコの政策は観光客数や木彫り製品の需要をまちがいに拡大した。

ザフィマニリ文化の商品化の流れのなかで、木彫りも否応なく変化していった。あらたな消費者の需要に応じて、これまで作られていなかったものが作られるようになった、というのがその変化のひとつ。(中略)

ザフィマニリの人びとは、西欧のような高い椅子に腰かけて食事や作業をするのでなく、日本のように床にじかにすわり、低い位置で生活する。そこで来客があったとき、客に腰かけを使うよう勧める。考えてみれば、座面に模様が彫られていてもじつくり見ることはほとんどないのだが、観光客むけの商品が普及したために、模様があっても不自然でなくなっている。よきにつけ悪しきにつけ、観光客のセンスが逆にザフィマニリの人びとに影響し、浮彫りの本来の意味を変えてしまっているのである。

こうしたことがらはほんの一例で、商品化によって木彫りはさまざまなかたちで変化した。人びとにとって木彫りは、農作業のあい間におこなう一時的労働にすぎなかったが、現在では畑の世話を小作人に任せ、農繁期にも木彫りをひたすら作りつづけるブロの職人がいる。こうした人びとは、自分の職業をアーティスト(作家)と称している。そうした人たちのなかには、容器や腰かけのような立体物をいっさい作らず、古民具に浮彫り模様をほどこすだけの人もいる。デザインに独創性を発揮するのであれば、たしかに職人というよりアーティストと呼んだほうが適切だろう。

〔中略〕

文化と文化遺産、複雑化していく相互関係

マダガスカルは文化遺産が示すように、文化遺産がはらむ問題は、状況に応じて異なった様相を呈する。日本の無形文化遺産は、あるていどまで人に見られることを意識しているから、工芸であれば商品化しているし、芸能であれば観光化している。それは悪いことでもなんでもないが、マダガスカルは状況とは異なる。マダガスカルは工芸は商品としての側面をもつものの、商品化されてから半世紀ほどしか経っておらず、いまだに生活必需品を作る技術という側面を残している。ふたつの側面の違いは大きく、文化あるいは文化遺産についての考えかたを複雑にしている。

商品としての木彫り製品は、それ自体が文化的商品として流通する。文化的商品はふつう、すべての消費者に効用をもたらすわけではなく、鑑識眼を持つ一部の批評家の審美的基準にかなうとか、生産地を訪れた一部の観光客にとっての記念になるなど、かぎられた消費者だけに満足を与える。つまり文化的商品の価値は、これら一部の消費者との「出会い」に依存するのであり、商品生産の背後で木彫り技術を伝える地域社会のありかたは製品の価値に反映しない。

いっぽう生産者にとって商品は、特定の消費者の選好にかなってさえいけばよく、一般的に「役に立つ」必要はない。ザフィマニリの木彫りの場合、エキゾチックな魅力によって文化的他者を惹きつけさえすれば、商品はおのずから価値を帯びる。文化とはそもそも、複雑な経緯によって洗練された技巧をとまなうものだが、文化的商品にはそれが集約されている(ときには見かけだけの

場合もある)。このように商品に集約され、特定のコンテクストを離脱して流通する文化を、「アイコンとしての文化」と名づけることができる。

いっぽう生活必需品としての木彫り製品においては、交換価値がほとんど意識されず、それ自体が文化的であるとは考えにくい。しかし、木彫り製品の製作や使用は、地域の社会関係や自然環境に照らして無駄のないかたちで洗練されており、その意味で、地域に根ざした文化に支えられている。こうした諸関係あるいは「システムとしての文化」のなかで、たとえば素材の減少という問題が生じたとき、人びとは素材を多様化させたり、少ない素材で製作したりするような工夫を積みかさね、システムに生じたほころびを繕おうと試みる。

〔中略〕

木彫り製品そのものに体現されるアイコンとしての文化と、木彫り製品の背後に控えるシステムとしての文化。両者の相違は、天才による技巧の粋を意味する古典主義的な「文化」と、あらゆる人類が生活様式・行動様式として有するアメリカ文化人類学流の「文化」の相違に通じている。ここでは詳述する余裕がないが、文化の意味合いがまったく異なっていることに注意していただきたい。ザフィマニリの木彫りをめぐっては、このふたつの文化観がせめぎ合っている。

〔飯田卓「マダガスカルで考える、文化と無形文化遺産」(SYNODOS 二〇一七年五月二四日)より〕

課題文 2

仮面姿の異形の神が、誰彼かまわず臭い泥を塗りたくる厄払いの伝統行事が、沖縄県宮古島市で続けられている。今秋、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の無形文化遺産への登録が期待される「宮古島のパーントウ」。だが近年、軽い気持ちで訪れた見物客が「服を汚された」などと訴えるトラブルも起きているという。現代社会と伝統行事の関係について考察している民俗学者、畑中章宏さん(55)と現場を訪ねた。

泥める奇祭「パントウ」 仮面姿の異形の神が走る

ナマハゲなど「来訪神」、ユネスコ無形文化遺産登録へ

今月八日、宮古島北部にある島尻地区。日が陰り始めた海辺の野原で、見物客ら百数十人が、パントウと呼ばれる仮面姿の神が現れるのを待ち構えていた。

「あれっばくない?!」

「えっ、出て来た?」

野原を横切る一本道のかなた、泥まみれのつる草に全身を覆われた姿が見え始めると、スマホのカメラを構える人々に興奮が広がった。畑中さんもカメラを手に「まるで人気キャラや有名人の『出待ち』をしているような雰囲気ですね」。

杖をつき、ずんずん近づいてくるパントウ。撮影に夢中で逃げ遅れた男性に無言でつかみかかると、独特の臭気を放つ泥を顔中にべったり。集まった人たちを次々追い回し、辺りは悲鳴と歓声に包まれた。

パントウは、宮古島の方言で鬼神といった意味。海のかなたからやって来て、福をもたらす存在とされる。起源は定かではないが、島尻地区では毎年旧暦九月の二日間、地元青年会の若者たちがパントウに扮し、集落の人々や家々に厄払いの泥を塗ってきた。

今年が目立ったトラブルもなく、自治会長の宮良保さん(59)はほっとした様子。実は一〇年ほど前から日取りを非公表にし、問い合わせがあれば答えるようにした。年々増える見物客が観光バスで乗り付けるようになり、「地域の行事のかたちが変わってしまっ」と危惧する声が出たためだ。

さらに「五、六年前から『服を泥で汚された』と怒り出す人も出てきました」という話を聞き、身を乗り出す畑中さん。民俗学者として、アニメファンが作品の舞台となった神社仏閣を訪れる「聖地巡礼」や、騒音に配慮してイヤホンを使う愛知県東海市の「無音盆踊り」について考察するなど、時代が伝統文化に与える影響に関心を抱いてきた。

畑中さんはトラブルが目立つようになった「五、六年前」という時期に注目。「パントウはある意味、SNSで映える見た目。

知る人ぞ知る伝統行事だったが、一気に広く拡散したのでは」とみる。

自宅の庭に宴席を設け、パイントウを歓迎していた地元の男性に話を聞いた。「泥には無病息災の意味があります。外から来て、急に怒り出されても……」と■感気味に語る言葉に、畑中さんはうなずく。

畑中さんによると、日本人は昔から、祭りや伝統行事のかたちで、普段は遠くにいる神を村や家に迎え入れ、五穀豊穰(ほうじょう)や無病息災を願ってきたという。

「パイントウをSNSで知り、『リアル鬼ごっこ』的なイベントのお客さん感覚で訪れる人もいるのでしょう。でも、塗られる泥の意味を知れば、もっと豊かな経験ができるはずですよ」

島尻地区の青年会長、上地俊也さん(28)によると、数年前からトラブル防止のため、パイントウのそばに見守り役を付けるようになったという。パイントウ役も「見物客の」カメラには触らないよう、気を使うようになりました。

畑中さんは「共同体の中で完結していた祭りや伝統行事は、見物客ら『外部の視線』によって変化していく」と指摘。参加者がイヤホンを着用する「無音盆踊り」は、音楽を「騒音」と受けとめる住民が出てきたことも要因となって生まれた。

(中略)

畑中さんは「祭りや伝統行事には、担い手たちが時代によって柔軟に変えてもいいと考える部分と、変えてはいけないと考える根幹があり、それぞれの事例でまったく異なります」。

畑中さんが着目したのはパイントウの泥の由来。泥は「ンマリガー」という古井戸の底に沈殿したもの。島尻地区の人々が産湯と死に水に使ってきた井戸だ。

畑中さんは「この土地で生まれ、死んでいく人たちの行事という根幹は揺るがないでしょう」と話す。「一つとして同じものがない、継承の方法もパターン化できない。それが伝統行事の難しさであり、おもしろさでもあります」

〔上原佳久「神様に『汚された』怒る観光客 無病息災願ってるのに」(朝日新聞デジタル、二〇一八年一〇月二一日)〕

許諾番号 2014609 朝日新聞社に無断で転載することを禁じる

*注 国連教育科学文化機関(ユネスコ)政府間委員会は二〇一八年一月二十九日に「宮古島のパーントウ」を含む八県一〇件の日本の伝統行事を「来訪神 仮面・仮装の神々」としてユネスコ無形文化遺産に登録した。

問一 課題文1で著者が指摘する、ザフィマニリの木彫りをめぐる「文化観」にはどのようなものがあるか、課題文に出てくる表現を生かしながら、二〇〇字程度でまとめなさい。

問二 課題文1と2を踏まえて、「伝統文化」が「商品化」「観光化」されることがどのような状況を生じさせるのか、ユネスコ無形文化遺産登録が有する意義と問題も含めて、あなたの考察を六〇〇字以内で述べなさい。